

保育内容「表現」指導法における評価に関する研究

—ポートフォリオ記録による内発的評価の有効性について—

富金原 光 秀

Study on the teaching method of childcare contents "expression"
—about the effectiveness of the intrinsic evaluation portfolio records—

Mitsuhide Fukinbara

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

保育内容「表現」指導法における評価に関する研究

—ポートフォリオ記録による内発的評価の有効性について—

Study on the teaching method of childcare contents "expression"

—about the effectiveness of the intrinsic evaluation portfolio records—

富金原 光秀

Mitsuhide Fukinbara

I はじめに

幼児教育における5つの領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」は就学後の教科とは質的に異なり、幼児期における総合的な発達を踏まえながら「目標」や「ねらい」が領域ごとに設定されている。保育現場では、幼児の遊びや諸活動を通した発達段階を「5領域」の視点からとらえ、幼児理解に基づきながら領域ごとの活動の過程と達成について評価を行っていく。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の「表現」領域における評価の考え方は、幼児が人格の基礎を形成する重要な時期であること、就学後の「学習指導要領」において「生きる力」を育む基盤となるものを見据えながら、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」¹⁾ことを「ねらい」としている。それを踏まえて周囲のことに興味をもつ「心情」、主体的に活動に取り組む「意欲」、保育活動に向き合う「態度」が設定されている。保育内容の質的保証を考えたとき、領域ごとの指導法及び評価事項の考え方を理解することは必須となり、幼少期の教育において就学後の学習に向かう「取り組む姿勢」や「自覚的な学び」につながると考えられる。がしかし、これらの評価事項は必ずしも目に見える形や姿として現れてくるとは限らない。

「表現」領域の指導目標や評価事項を理解する限り、上手に描いたり、歌ったり、作品主義的な結果を求める評価が基準となることはないが、学生が造形活動に向かう動機の中には、作品や仕上りの出来栄を最優先に考え授業に取り組む姿が日々見受けられる。そもそも就学後の図画工作や美術教科には得手、不得手に加え、高等学校時に選択科目として履修した者とそうでない者とに分かれる現状がある。学生に個人差が見られる状況の中で造形表現の知識及び技能を習得するための質的保証を考えたとき、学び手が内発的行動を誘発するような指導法及び評価方法が欠かせないとの問題意識に至った。

そこで短期大学に通う保育士及び幼稚園教諭を目指す学生に対して造形表現の授業内に3歳児から5歳児向けの造形カリキュラムに沿った制作を行ってもらい、各個人が制作した作品をポートフォリオとしてファイルに記録し、その省察や改善を含めた講義と演習を3か月にわたり実施した。造形表現活動における制作物や活動の記録は、評価の際の重要な手がかりとなること、そして幼児一人一人の理解について連続した活動のプロセスを通して深めていく評価方法になると考えられる。学生自身が造形表現の授業時に制作した作品をポートフォリオとしてファイルに保管・記録し、自らの作品を客観視しながら省察を行い、あらたな自己課題や目標設定に気づきをあたえ、造形表現に対する内発的な省察とその改善にむけた意識の変化を追っていくことで、造形表現における自己評価の意義や有効性を明らかにしていきたい。

日々の学習経緯を記録していくことは、すでに保育現場においても学びの連続性を重視する観点から指導計画(指導案)や日誌を作成する際に行われており、教育活動の共有や省察・改善などに役立っている現状がある。幼児造形表現におけるポートフォリオ評価は、保育内容「表現」の具体的な「ねらい」と「内容」を計画・実践しながら、その外発的活動のプロセスを記録する教材となる。この記録の活用によって、教師同士が活動の記録を振り返ることを通して幼児の発達過程や幼児理解も深まっていくものと期待できる。²⁾当初、学生の中には「わたしは下手だから」「図工はもともと苦手」「上手に描けない」などの思いや見解が見られたが、彼らの制作に向かう「心情」「意欲」「態度」がどのように変化していくのかそのプロセスを考察した。

1. ポートフォリオの意義

ポートフォリオの保育現場での活用については、近年その意識が高まっている。本来ポートフォリオによる学習や評価は、一人一人の子どもが自らの「文脈」において創りであげていくという構成主義(constructionism)の概念をもとに体系づけられてきた評価方法である。子どもは、生活の文脈に即して自らの課題を再構成したり、創意工夫を凝らしていくプロセスを経る。それを踏まえると「表現」領域における学習は、人やモノとの対話を通じて徐々に醸成しながら構成されていくと考えられる。認知心理学者のガードナーによれば、ポートフォリオを活用した評価方法は、もともとアメリカ社会が創造的で個性ある子どもを育成することを求める教育的要請から生まれたものとして、その後パフォーマンス学習やプロジェクト学習等で多く用いられてきている。現在ポートフォリオは子どもの成長過程の記録を図るものとして学校教育の現場に活用されており、学ぶ過程で集めた資料とそれに対する自分の意見や感想、そのつど感じた事を書いたメモ、日記や連絡帳、自己評価や相互評価を記したもの、教師や助言者からのコメント、保護者や地域の人々からの感想や助言まで及ぶ評価対象事項となる。³⁾このようにポートフォリオは、ある目的にそって学んだ事柄を多様な評価手段を使って中長期にわたって収集したものであり、自己評価だけでなくクラスメイトや保護者からの助言を含めた、多面的な評価として機能している。

発達の最近接領域を示したヴィゴツキーは、一人一人の人間が自ら知識を構成していくプロセスにおいて、他者との関係による発達領域の重要性を指摘している。それは、使用する教材や人的環境における構成の仕方によって「どのように学ぶのか」が違ってくる⁴⁾ことを示している。あるいは誰と一緒に学習するかによって知識の構成の仕方が異なってくると言い換えることもできる。学習と学習の過程を、一人ひとりの幼児が知識を構成していくプロセスであると考え、知識は与えられるものと考えてきた従来のあり方に修正が迫られる。その意味において知識や技能はむしろ一人一人の人間が自ら主体的な活動を通じて自覚的に獲得していくプロセスであると考えべきである。そこでは、すでにもっている知識・技能に加え、再構成してできる知識をどのように結びつけていくのが問われてくる。

2. 自己評価と相互評価

幼児教育の基本は身の周りの生活環境を通して、幼児自ら主体的に遊びや諸活動に取り組む心情や意欲や態度の育成にある。それを踏まえれば「表現」領域における造形教育の評価は、それ自体を目的とした「内発的評価」を主として評価を捉える必要がある。さらにポートフォリオの記録による評価の射程は、ファイルの保管によって友達同士で見せ合いながら刺激を受けたり、教師同士の情報の共有や活動の省察や改善に至るまで、相互評価をし合う教育的効果にまで発展するものとなる。クラスメイトとの対話を交えて、「どのように描いたり」「貼ったり」「組み立てたのか」を常時知ることが可能となる。そして「メタ認知」として自己と対話しながら形や色や材質を踏まえて制作全体の構想を見通し、選択・判断をおこない、まとめあげていく過程を経る。それはおのずと他者の評価までが加わることとなる。教師もまた学び手の制作物を確認しながら、次回に向けた課題やテーマを一人ひとりの発達過程にしたがって提示したり、再構成することができる。表現の多様性に出会い、ものの考え方を広げていくためにもポートフォリオが潜在的にもつ内発的な評価を有効活用することが幼児造形教育や就学後の学習活動に大きな効果をもたらすと考えられる。よい評価はそれ自体が指導にもつながるものとなる。

子どもの発達・成長を見ていく際は、中長期にわたって幼児の学習経過のプロセスを追って多面的に評価していくことが求められる為、ポートフォリオの活用によって幼児の学びを刺激するような情報を与えるものとした。また保育士や幼稚園教諭をめざす学生においても、内発的評価の意義とその有効性を各自が実感として認識することができれば、現場での有効活用や発展も期待できる。自己の内発的な評価によって自ら課題を見つけ、主体的に学習しなおし、思考し、外発的に問題を解決する資質や能力を養うことが教職課程に喫緊の課題となる。

II ポートフォリオ記録による自己評価の実施及びアンケート調査の分析

保育者をめざす入学当初の学生が、造形表現に対してどのような印象や意識を抱いているのかを明らかにするために、初回の授業の中で各自に目標を設定してもらい、各制作の課題に対してどのような学びを引き起こし、どのように対処し改善されたのか、振り返りなどを交えながら検討し次回の制

作にどのように生かしていくのかについて、一定期間の中でその過程を追っていった。ポートフォリオによる評価は自己に対する評価であることが前提となり自由度も高いものとなるが、一方で各自の課題や学習評価のあり方の方向づけにもかかわる内容となるため、学生にも自ずと責任が伴う学習工程となる。

1. アンケート調査及び結果

本研究では幼稚園教諭・保育士資格を目指す学生の造形表現における指導法や援助の視点及び評価の望ましいありかたについて、ポートフォリオを使用した内発的評価における調査とその有効性について考察した。学生が幼児の造形表現と同様の課題に対して追体験するように作品を制作し、その後各自のポートフォリオにファイルし、省察・改善を行う。

◆対象者

保育者を養成する短期大学、2017年度に入学した1年次学生76名（男18名、女58名）2017年4月～7月までの造形表現の授業で作品（各種技法を用いた描く活動）を制作し、ポートフォリオを活用して記録と発表を行う。その後、各自の制作や発表における省察や改善点についてアンケート調査を実施した。

◆制作課題（オートマチック各種技法）

課題となるテーマは幼児造形「各種技法を用いた描く活動」に沿って、各学生が課題づくりを行う。

1フィンガーペインティング（指絵） 2ドリッピング（吹き流し・絵の具流し） 3スタンピング（型押し）／マーブリング（墨流し） 4コラージュ（貼り絵）／5にじみ・ぼかし絵 6スパッタリング（霧吹き）／7スクラッチ（ひっかき）

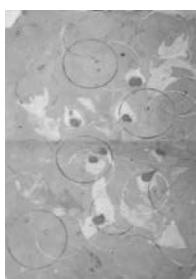
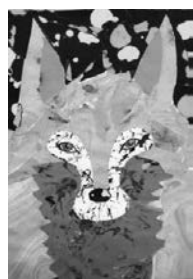
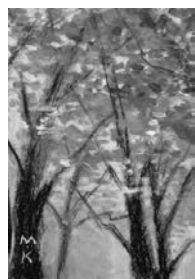
学生作品 1

学生作品 2

学生作品 3

学生作品 4

学生作品 5



◆アンケート内容と項目 I

○制作時の調査項目

- ① 自分にとって次の課題を見つけることができた。
- ② 丁寧に仕上げることができた。
- ③ 意欲・関心をもって作品制作に取り組むことができた。
- ④ 今回の計画やねらいは達成できた。

⑤ 創意工夫をして制作することができた。

●自由記述欄（ポートフォリオを活用した制作を通してのまとめと感想）

○評価項目（※項目ごとに4段階評価及び理由やコメント）

A：とてもよくできた。B：だいたいできた。C：あまりできなかった。D：ほとんどできなかった。

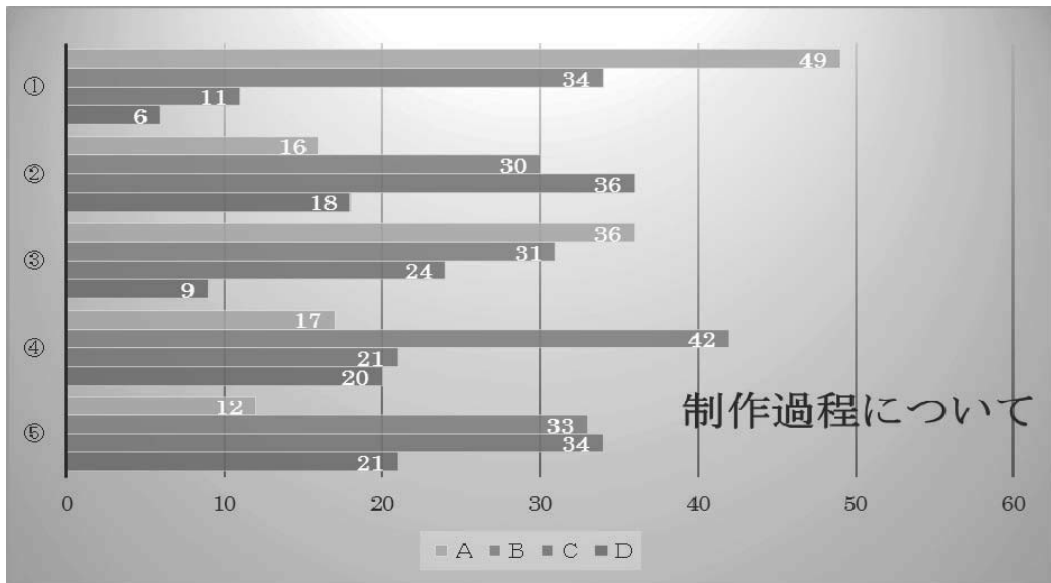


表 1

■考察 I

制作①について【A：49% B：34% C：11% D：6%】

自分にとって次の課題を見つけられたかとの項目に対して前向きな回答がAB合わせて8割を越えた。コメント欄では「次回は、細かいところまで描くことができるようになりたい。」「雑な塗り方が目立ったので次は丁寧に描いていきたい。」「次回はより綺麗な色をつくりだせるようにしたい。」「自然や本物らしさをより表現したかった。」「など次回に向けた意欲が見受けられた。また「友人の作品をみて工夫のしかたを学んだ。」「見せ方や飾りの仕方を学ぶことができたので次回に生かしたい。」「他者の作品を観ながらもっといい作品をつくりたいと感じた。」「友達のつかった技法を次回自分なりに生かしていきたい。」「など他者のポートフォリオを確認したり、発表を通じて学習する姿勢が見られた。その他「周囲に遅れをとらぬよう意識した。」「動物の色をリアルに描きたかったが描けなかった。」「もっと考えて技法を活用したい。」「など。

制作②について【A：16% B：30% C：36% D：18%】

丁寧に仕上げることができたかについて「とてもよくできた。」が16%にとどまる結果となった。日々の生活の中で「丁寧さ」を心がけることは教師の資質・能力に関わるため、今後の経過をつぶさ

に見ていく必要性を感じた。コメント欄では「若干雑なところが目立った。」「雑な塗り方が目立った。」「雑なところがあるが、丁寧さを意識して描いた。」「きれいな夕日になるように5色を丁寧に活用した。」などの回答が見られた。

制作③について【A：36% B：31% C：24% D：9%】

意欲・関心をもって作品制作に取り組むことができたかのコメントでは「よく観察して考えながら集中して制作できた。」「積極的に表現できた。」「抽象的な形からイメージを膨らませることができた。」「新聞紙での制作は小学校以来で久しぶりに楽しかった。」「幼いころに戻ったみたいで楽しんで制作できた。」「何を作ろうか考える過程がとても楽しかった。」「童心にかえり、夢中になって取り組んだ。」「手でちぎったり切ったりして形を楽しみながら制作できた。」「子どもが楽しんで製作している姿が想像できた。」などの回答となり、制作に楽しみ、意欲的に実技に取り組む前向きな学生が多く見られた。しかし一方で「あまり関心をもって取り組めなかった。」との回答も見られ、今後の個別指導や支援が必要となる。

制作④について【A：17% B：42% C：21% D：20%】

制作の計画やねらいは達成できたかについては「偶然できた形を想像して上手に作りたいものを作ることができた。」「にじみ効果をうまく利用して幻想的かつ本物らしさを上手く表現することができた。」「テーマ通りの仕上がりとなった。」「さまざまな形から一つのテーマの作品を仕上げることができた。」「マブリングがきれいにできた。絵の上手や下手にかかわらず、楽しみながら遊べる。」など計画にそって進められた学生がいる一方で「これがつくりたいと思いは強くても、理想的に仕上げるができなかった。」「計画的に取り組んだがあまり達成できなかった。」「自己表現が上手にできなかった。」「完成図とちがう作品となってしまった。」など計画やねらいを達成できずに葛藤や試行錯誤するコメントも多く見られた。

制作⑤について【A：12% B：33% C：34% D：21%】

創意工夫をして制作することができたかの問いについては「とてもよくできた。」が12%にとどまる結果となった。「猫をデフォルメして工夫した。」「人魚のシルエットや魚の目の素材を工夫して仕上げることができた。」「花と太陽を工夫してイメージを膨らませることができた。」「空白を有効に活用できた。」「発想を変えれば作品がどんどん変化していく・・・。」「皆の発表のいいところを取り入れて製作した。」「色のバランスを考えながら彩色できた。」「蝶の羽を様々な模様をつけて表現することができた。」「水をつかってグラデーションを表現することができた。」など創意工夫を心がけて制作に取り組んだ結果、上手く制作に活かした学生に対して、「発想がわからずに工夫が乏しい作品となった。」「次回はよりよいものを作りたい。」「何もない形からどう想像するか悩んだ。」「より工夫が必要と感じた。」など工夫の余地が必要と感じる結果となった学生も多く見られたが、次回の制作に向けた前向きなコメントも確認できた。

●自由記述欄について

ポートフォリオを活用した制作を通してのまとめや感想等の自由記述欄では、「ファイルにすることで自分のレベルにそった学習ができる」「過去の自分の制作の段階がわかるので、振り返りに良い。」「現場の子どもとの制作でも使えそう。」「保護者にも子どもがつくった作品を見て喜んでもらえそう。」「人と技術を比較しないので、焦らず学べると感じた。」「成長や発達の段階が確認できる記録となる。」「幼稚園に通っていた頃の作品を残しておいてくれるだけで、嬉しいと感じる。」などポートフォリオの活用が、学生にとって教職としての意識を高める動機に結びつく回答が見られた。

◆アンケート内容と項目Ⅱ

○発表時の調査項目

- ① クラスメイトの作品や発表から表現方法など学ぶことができた。
- ② 教師として恥ずかしがらずに人前で発表することができた。
- ③ 発表では自己表現することができた。
- ④ 今までの造形表現の見方や考え方を広げたり、深めることができた。

●自由記述欄（これからの幼児造形表現に生かしたい事 etc）

○評価項目（※項目ごとに4段階評価及び理由やコメント）

A：とてもよくできた。B：だいたいできた。C：あまりできなかった。D：ほとんどできなかった。

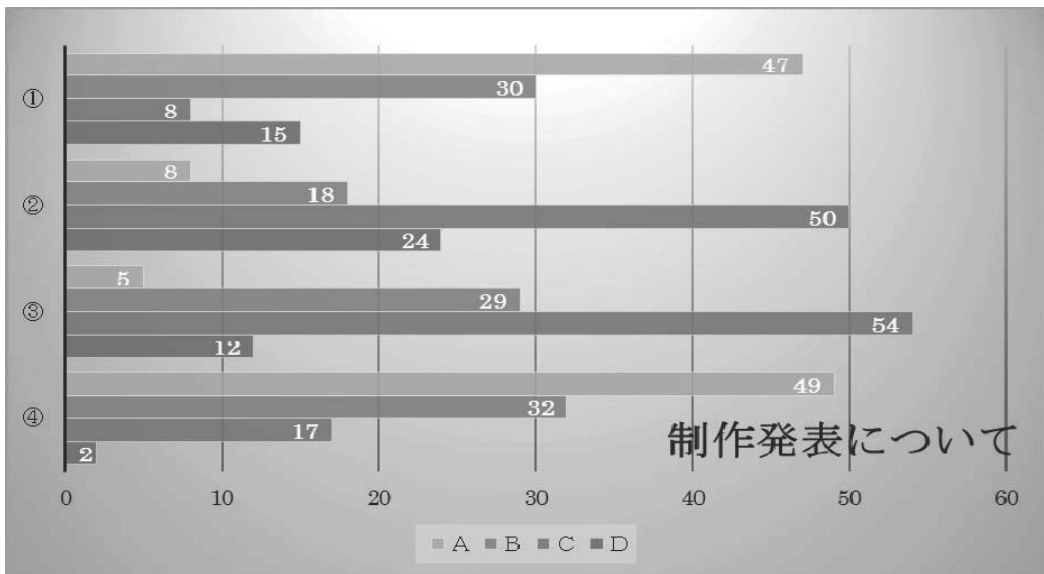


表 2

■考察Ⅰ

発表①について【A：47% B：30% C：8% D：15%】

クラスメイトの作品や発表を通じて参考となったり、表現技法を学習したりすることが「とてもよくできた」との回答が47%と多くみられた。発表や自己の作品を繰り返し確認できるポートフォリ

オによって他者との比較や、多彩な表現の可能性、自身の制作プロセスに対する省察や改善点を模索している様子が確認できた。

発表②について【A：8% B：18% C：50% D：24%】

入学当初の学生にとって人前で発表することに慣れておらず、恥ずかしがっている学生が約7割を占めた。教師となる学生に対して繰り返し発表の場を引き続き行い、いい意味で場慣れしていくことが課題となる。

発表③について【A：5% B：29% C：54% D：12%】

自己表現できたかの質問では「自信をもって作品を説明できなかった。」など恥ずかしい感情が先行してしまい「あまりできなかった。」が54%と多数を占め、自己表現が上手くできなかったとの回答が多く見られた。また自由記述欄では「造形での表現の仕方がわからない。」など戸惑う学生の声もきかれた。今後、幾度と発表の機会を増やししながら自己表現力を高めていくことが課題となる。

発表④について【A：49% B：32% C：17% D：2%】

造形表現についての見方が広がったり、考え方が深まったと答える学生が多く見られた。このことは制作の発表に加え、友人やクラスメイトの制作した作品を見せ合うことで、表現の多様性を学ぶ学習効果に影響していると考えられ、ポートフォリオの有効性が確認できる結果となった。

●自由記述欄について

これからの造形表現に生かしたいこと等の自由記述欄では、「クラスメイトの作品を見習いたい。」「友人の作品に刺激された。」「今後他者の創造的な作品を参考にしていきたい。」「発表を聞きながら皆の作品をたくさん吸収していきたいと感じた。」など、友人やクラスメイトの作品に刺激され、次回の制作に向かう前向きな姿勢となる回答が多くみられた。このことは発表によって制作物をクラスに開示することで、多くの学生のモチベーションや意欲、表現活動への積極的な心情や態度をもたらす効果が期待できる結果となった。また、「ハキハキと聞こえるように恐れずに発表したい。」「しっかり前をみて発表することができなかった。」「人前にでるのはまだ慣れてないと実感した。」「堂々と人前に立って発表し、自分の作品を他者に上手に伝えられるようにしたい。」など、自身の発表に対して、真剣に省察・改善しようと向き合う回答も多く見られた。これらを踏まえ、人前で話すことについて、あがらずに落ち着いて発言することの大切さや難しさを「メタ認知」として学生が体感し、次回以降に改善しようとする真摯な姿勢がうかがえる結果となった。その他「同色の折り紙を使用しすぎて、持参した材料が足りなくなってしまったので、今回は計画的に制作したい。」「新聞紙を破いてできた形を観察したり、想像することで感性が鍛えられると感じた。」「さまざまな作品を見てキレイだったり、個性的な作品に刺激された。自分もそう思ってもらえる作品を作りたい。」「つぎは背景の色をにじみ効果を用いて工夫できるようにしたい。」「指で描く効果が、筆では表せない面白い表現となることをはじめて知った。」「色の使い方、技法を一つの作品の中でたくさん組み合わせたい。」「水分の量を調節するだけで色にムラがでたり、はみ出しがなくなることに気付い

た。」「手が汚れてしまったが丁寧に仕上げることができた。」「創意工夫を心がけて制作を深めていきたい。」「関心をもって取り組んだが納得のいく作品に仕上がらなかった。」「ハサミの扱いが人よりも雑であることに気づいた。」など自身の制作を通して幼児に造形指導・援助する場面を想像しながら、幼児への対応の仕方や支援や援助の方法を学生自ら思考し、判断する心情や意欲が確認できた。

Ⅲ 結果及び考察

保育内容「表現」領域で用いるオートマチック各種技法はもともと芸術表現として発生し、素材の性質や偶発性による表現の面白さをもつ。また芸術療法としても、保育現場で有効な造形表現活動の主要なプログラムとして認知・実践されている。本研究では、それらの技法における表現の出方を試したり、技法と技法を組み合わせたり、模様や材料を寄せ集めてプリコラージュ制作をしたり、イメージワークをしながら保育者を目指す学生がポートフォリオによる内発的評価のプロセスを通じて、自身がどのように変化し、幼児の造形活動に対する意識や省察及び改善に作用したのかを3カ月にわたり調査してきた。

アンケート調査の結果から、造形表現に対する苦手意識の克服や造形表現を親しむための指導や援助のあり方について、自己の内発的評価を通して、その有効性が全体として明らかとなり、これらは教師の学生理解を深める手掛かりとなると同時に、保育者を目指す学生にとって保育内容「表現」領域の評価の考え方や、具体的な指導法について等、幼児理解に向けた記録による省察の重要性が示される結果となった。各学生がポートフォリオを使用して実際にクラスメイトや友人との相互作用的なかわりを通じて自分なりに探求したり、工夫したり、自己課題や技能を発見していく姿勢を認識していく機会にできたと考えられる。このことから「記録」は教師が自分自身の造形表現をはじめ、幼児の発達を踏まえた姿を振り返る際に重要な役割を果たしていくこと、さらには幼稚園全体で情報を共有したり、学びあうための基盤となる⁵⁾と考えられる。これらはポートフォリオによる自己の内発的な評価が、発達の過程に応じて、一人一人の育ちのプロセスと成果を総合的に評価していく保育指導法となることを示唆している。

幼児期の表現のあらわれは、特定の活動や媒介だけでなく、その表情や身振りなどさまざまに外発する表現全体の総体としてあらわれる。記録を通じて自分の思いを表現して伝えることや、他者の作品を通して表現を受けとめ、「自己発揮」や「自己調整」をしながら、社会性を学ぶ機会となると考えられる。そして保育・教育現場における「記録」の有効活用によって、幼児の発達・成長における把握と課題とを互いの保育者や保護者にむけて開示し、情報を視覚化して省察できる態勢を整えておくことがより良い保育及び保育の質の保証につながる。

引用文献

- 1) 飯田聡彦・木村美幸 2017「幼稚園教育要領」〈平成 29 年公示〉フレーベル館 p 11、p 20

- 2) 長瀬・小谷・田中 2013 『幼児教育学ハンドブック』2013 風間書房 p35、p36
- 3) 加藤幸次・安藤輝次 1999 『総合学習のためのポートフォリオ評価』黎明書房 p45
- 4) 前掲書 p18
- 5) 文部科学省 平成 25 年 7 月 『指導と評価に生かす記録』チャイルド本社 p 5

参考文献

- 1) 文部科学省 平成 22 年 7 月改訂 『幼児理解と評価』ぎょうせい
- 2) 田中耕治・西岡加名恵 1999 『総合学習とポートフォリオ評価法 入門編』日本標準
- 3) 飯田聡彦・木村美幸文 2017 「保育所保育指針」〈平成 29 年公示〉フレーベル館
- 4) 森眞理 2016 『ポートフォリオ入門』小学館
- 5) ヴィゴツキーL.S 柴田義松訳 2001 『思考と言語』新読書社
- 6) ガードナーH 2003 『多元的知能の世界』日本文教出版